

„in got giloubet ioh in mih“ Gelehrtsprache としての古高ドイツ語

平井 敏雄

0. はじめに

古高ドイツ語には、動詞 *gilouben*「信じる」¹⁾が前置詞 *in* をともなった前置詞格補足語を従える用例が多数見られる（この際、*in* は 4 格を支配する）。

in got giloubet ioh in mih O. 4, 15, 4.²⁾

神と私を信じなさい

古高ドイツ語の *gilouben* に対応する現代ドイツ語の動詞 *glauben* には、こうした用法はない。*glauben* は 3 格・4 格の補足語もしくは、*an*+ 4 格という前置詞格補足語と共に用いられる。³⁾前置詞をとる場合には *an* が用いられ、*in* が使われることはない。

1) 古高ドイツ語の単語は、作品の書かれた方言・時代によって綴りがまちまちであるが、本稿では、特に断らない限り、代表形として、9 世紀の東フランク語の形を用いる。これは主として Tatian に現れる形であり、古高ドイツ語研究の分野ではこれが慣習になっている。また、以下に引用するテキストにおいては、Notker を除いて、アクセント符号その他の diakritisch な記号を全て省略したことを予め断っておく。

2) Kelle, Johann: Otfrids von Weissenburg Evangelienbuch Band 1, Text und Einleitung. Aalen, 1963. (Neudruck der Ausgabe 1881). 以下、Otfrid の引用は全てこのテキストによる。

3) Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in 10 Bänden. Duden, Mannheim ³1999.

Glaubet an Gott und glaubet an mich! (Joh. 14, 1)⁴⁾

Grimm の Deutsches Wörterbuch (以下 DWB) を繙くと、glauben の項 (Arbeitsstelle der DWB/Kochs/Neumann 編) では、古高ドイツ語の例について、「初めはラテン語の credere in に対応して in を用いた用法が作られたが、Notker ではすでに an にとって代わられた」と記述している。⁵⁾ Jacob Grimm の Deutsche Grammatik の記述も、これに準ずるものである。⁶⁾ これに対し、DWB の in の項 (Heyne 編) を見ると、こうした in の用法が他のゲルマン諸言語⁷⁾ にも古くから見られることを根拠に、これが必ずしもラテン語の影響によって新たに作られた語法ではなく、本来ゲルマン語に備わっていた語法である可能性も否定していない。⁸⁾

本稿は、この glauben in + 4 格という用法が、ラテン語の模倣によって生じた語法であり、本来のドイツ語の用法ではなかったことを、古高ドイツ語における用例の現れ方の分布状況から明らかにしようとする試みである。同時にまた、はじめは単に形式的な翻訳の結果であったこの語法が、現存する古高ドイツ語作品中では、直接の翻訳ではない部分にも用いられていることを示すことで、その大部分が、全体として一種の Gelehrtensprache であるという、古高ドイツ語の伝承の状況自体が抱える問題点を、改めて浮き彫りにすることをも目的としている。

4) Die Bibel. Deutsche Bibelstiftung, Stuttgart 1967. S. 154.

5) Grimm, Jacob u. Wilhelm: Deutsches Wörterbuch (DWB). Hirzel, Leipzig 1854-1960, Band IV. I. IV, S. 7823.

6) Grimm, Jacob: Deutsche Grammatik 4, 2. Teil (1898). Olms, Hildesheim 1989. S. 1034.

7) 原文 deutsche dialecte.ここでは「ドイツ語の諸方言」ではなくて、ゲルマン諸言語をさしている。

8) DWB Band IV. II, S. 2101.

1. 本論 古高ドイツ語における gilouben in + 4 格

Schützeichel の Althochdeutsches Wörterbuch⁹⁾ の gilouben の項によると、動詞 gilouben は、この辞書が典拠としている古高ドイツ語主要作品¹⁰⁾のうち、Benediktinerregel, Bruchstück einer Beichte, Exhortatio ad plebem christianam, Fränkisches Taufgelöbniß, Georgslied, St. Galler Paternoster und Credo, Isidor, Lorscher Beichte, Monseer Fragmente, Murbacher Hymnen, Notker, Notker-Glossator, Otfrid, Otlohs Gebet, Physiologus, Tatian, Weißenburger Katechismus の各作品に例証されている。以下にこれらの作品における gilouben の実際の用例を、原則として全て確認し (Notker の著作のみは、調査の対象を代表的な 2 作品に限った)、古高ドイツ語における gilouben in の用法の分布を見てみたい。

1.1. Benediktinerregel

ベネディクト派修道会会則の行間逐語訳である。gilouben の用例は 5 例あるが、前置詞 in を伴った用例はない。¹¹⁾ なお、これら 5 例に関しては、対応するラテン語原文の動詞 credo も、全て in を伴わない語法が用いられている。

1.2. Bruchstück einer Beichte

懺悔 (告解) の際に用いられた定型的な文章で、教会の実用散文に属する。gilouben の用例は 3 例見られ、うち 1 例が、前置詞 in を伴った用例で

9) Schützeichel, Rudolf: Althochdeutsches Wörterbuch. Niemeyer, Tübingen 1989.

10) Schützeichel は、古高ドイツ語の時代区分上の下限を、Notker, Otlohs Gebet の時点においており、Williram の著作や Memento mori 等の作品は「古高ドイツ語」に含まれていない。

11) テキストは、Daab, Ursula: Die Althochdeutsche Benediktinerregel des Cod. Sang 916. Niemeyer, Tübingen 1959 を用いた。

ある。¹²⁾

1. Kiloupištu in got fater almahtigan? enti in sinan sun, den haltentun Christ? enti in den uuihun atum?

「全能の父なる神を信じますか？ その息子たる、救い主キリストを信じますか？ 聖霊を信じますか？」

これは、ラテン語による告解の定型的な文章の翻訳であり、ラテン語原文のこの部分は、ミサ定型文中の Credo に由来する。Credo の対応する部分を抜き出すと、

credo in unum deum
patrem omnipotentem
et in unum dominum ihesum christum
et in spiritum sanctum dominum

である。in を伴った前置詞格補足語の用法が、ラテン語のそれとぴったり一致していることがわかる。この対応を見るだけでは、この in の用法が、ラテン語を模倣したものなのか、ドイツ語に本来あったものなのかは判別できないが、これについては、以下に述べる、極めてよく似た表現を含む 1.4 及び 1.6 の対応例が参考になろう。

1.3. Exhortatio ad plebem christianam

この作品には、動詞 *gilouben* の用例として、次の 1 例がある。¹³⁾

12) テキストは、Steinmeyer, Elias von: Die kleineren althochdeutschen Sprachdenkmäler. Weidmann, Berlin / Zürich ²1963 (=unveränderter Nachdruck der 1. Auflage 1916). S. 326 によった。

13) テキストは、Braune, W. / Ebbinghaus, E.: Althochdeutsches Lesebuch. Niemeyer, Tübingen ¹⁶1979. S. 28 によった。

- A. 17. thictota ... / daz diu allem / christanem za galaupenne ist /
ia auh simplun za pigeanne, / daz alle farstantan mahtin / Ia
in hucti cahapen.
- B. 17. tihtota ... / za diu, <...> allem christanem za galaupian ist /
ia auh simplun za pigehan, / thaz mahtin alle farstantan ia in
gahuhti gahapen.

「このことは、全キリスト教徒が信じ、常に認めなければならないことだが、(聖霊は、) 全ての人理解でき、心にとどめることができるように語った。」

Exhortatio には、A、B 2つの写本が残されている。Aは現在カッセルにあり、9世紀にフルダで書かれたもの。Bはミュンヘンにあり、Aより若干新しいもの。この箇所は、ラテン語原文 dictavit ..., ut, quod omnibus credendum est christianis semperque profidendum, omnes possent intellegere et memoriter retinere の訳である。複雑なラテン語の構文の解析に苦心した跡が、A、B 2種類のテキストの相違から読み取れる。原文では ut の文は挿入文であるが、Aはこの ut を機械的に daz に置き換え、一見すると thictota の目的語文のように訳している。Bは thihtota za diu, thaz ... と、原文の構造を正しく読みとっている。<...> は写本の判読不能箇所、ここに ut に対応する接続詞が書かれていたと考えられる。¹⁴⁾

いずれにせよ、強くラテン語の語法に影響を受けた訳であるが、原文 credendum は in をとっておらず、ドイツ語訳にも in + 4 格は現れていない。

1.4. Fränkisches Taufgelöbnis

洗礼の際の誓約を書き表したものであり、1.2 と同様、教会における実用

14) Steinmeyer の刊本 (注 12 を見よ) では、daz が補われている。

散文に属する。11 行のテキスト中、7 行に gilouben の用例が含まれる。¹⁵⁾

5. Gilaubistu in got fater almahtigan? Ih gilaubu.

Gilaubistu in Christ gotes sun nerienton? Ih gilaubu.

Gilaubistu in heilagan geist? Ih gilaubu.

Gilaubistu einan got almahtigan in thrinisse inti in einisse? Ih gilaubu.

Gilaubistu heilaga gotes chirihhun? Ih gilaubu.

Gilaubistu thuruh taufunga sunteono forlaznessi? Ih gilaubu.

Gilaubistu lib after tode? Ih gilaubu.

「全能の父なる神を信じますか？ 信じます。／救い主なる神の子キリストを信じますか？ 信じます。／聖霊を信じますか？ 信じます。／三位にして一体なる全能の神を信じますか？ 信じます。／神聖なる神の教会を信じますか？ 信じます。／洗礼による罪の赦しを信じますか？ 信じます。／死後の生を信じますか？ 信じます。」

1.2 と同様、言うまでもなく、ラテン語による宣誓の定型的な文章の訳である。これも、ラテン語原文は、ミサ文中の Credo に由来する。再び Credo 中の対応する部分を抜き出すと、

credo in unum deum / patrem omnipotentem

et in unum dominum ihesum christum

et in spiritum sanctum dominum

(なし)

15) テキストは、Braune, W./Ebbinghaus, E.: Althochdeutsches Lesebuch. Niemeyer, Tübingen ¹⁶ 1979, S. 38 によった。

et unam sanctam catholicam / et apostolicam ecclesiam
(confiteor) ... unum baptisma / in remissionem peccatorum
(expecto) ... et vitam venturi seculi

となる。「三位一体の神を信じるか?」の部分は正規の Credo の文にはないが、これは、三位一体の教義を理解させることに力を注いだカトリック教会が後から付け加えたものであろう。¹⁶⁾

1.2 より物理的に分量の多いこの対応を見ると、興味深い事実が判明する。ドイツ語で *gilaubistu* (= *glaubst du*) が *in*+4 格を従えている例は、全て Credo のラテン語で前置詞 *in* が用いられている箇所である。これに対し、後半の3つの宣誓においては、ラテン語では *in* を伴わない対格が用いられている。このうち最後の2つは、動詞が *credo* から *confiteor*, *expecto* という別の語に交替しているため、これらの動詞の格支配に従って、前置詞なしの対格が用いられているが、ドイツ語訳の方は、動詞は *gilaubistu* のままで、補足語のみを機械的にラテン語の形に対応させている。これは、ラテン語の語形を忠実にドイツ語の単語に置き換えただけの翻訳であり、この箇所を見る限り、ドイツ語における *gilouben*+対格、及び *gilouben*+*in*+対格という2つの用法の間に、自立した意味上の区別があるとは考えられない。また、Credo 中に対応する表現が見られない、4つ目の宣誓（「三位一体の神を信じるか?」）において、*in* なしの対格が用いられていることから、ドイツ語においては *in* なしの表現の方が、本来的で自然であったのではないかという推測が成り立つ。

1.5. Georgslied

4世紀の殉教者聖ゲオルギウスの受難を歌った、9世紀の古高ドイツ語

16) 三位一体の神秘をゲルマン人に理解させることは、当時のカトリック教会の重大な関心事であった。三位一体の正当性を説く Isidor の論文がいち早く古高ドイツ語に翻訳されたのも、このような事情からであったと考えられる。

による韻文作品である。gilouben の用例が 1 例ある。

49. Geloubet ehz 「このことを信じなさい」¹⁷⁾

『ゲオルクの歌』は保存状態が非常に悪く、テキストの正確な読みに関しては、現在に至るまで定説が見られないが、この geloubet ehz に関しては、ehz=iz、すなわち、ehz は中性単数 4 格で geloubet の目的語という解釈で、各研究者は一致している。古高ドイツ語オリジナルの賛歌である『ゲオルクの歌』においては、gilouben は in を伴わない対格と共に用いられている。

1.6. St. Galler Paternoster und Credo

5. Kilaubu in kot fater almahticun, ... enti in Ihesum christ sun
sinan ainacun,

「我は全能の父なる神を信ず。神のひとり子たるイエス・キリストをも信ず」

10. kilaubu in uuihan keist, in uuiha khirihhun catholica, uuihero
kemeinitha, urlaz suntikero, fleiskes urstodali, in liip euuikan,¹⁸⁾

「我は聖霊を、普遍にして聖なる教会を、聖徒の交わりを、罪人の赦しを、肉体の甦りを、永遠の生を信ず」

現存するドイツ最古の、主の祈りと Credo の翻訳である。1.2 の告解の文章、1.4 の受洗の誓いと同様の表現が多数含まれているが、注目すべきは、前置詞 in の使われ方である。1.4 にもふれたが、Credo のラテン語原文では、「教会を信ず」の箇所以下では、動詞の目的語として in を伴った前

17) この部分のテキストは、高橋輝和『古高独語詩「ゲオルクの歌」の研究』（岡山大学文学部研究叢書 4、1990 年）の 205 頁によった。写本の綴りを忠実に写したものである。

18) テキストは、Braune / Ebbinghaus: a. a. O. S. 12 によった。

置詞格補足語は使われていない (fleiskes urstodali の原文は、(expecto) resurrectionem mortuorum)。にもかかわらず、ドイツ語訳では、in uuiha khirihhun と、in が補われ、さらに、原文では動詞が交替しているため本来 in を用いない「永遠の生を」の部分にも、in を補っている。

こうした現象が生じた理由としては、次の3通りが考えられる。1つめは、この翻訳の底本となったラテン語原文が、現在カトリック教会において公式に用いられている Credo の本文とは若干違ったものであった可能性である。例えば、sun sinan ainacun のような、ラテン語の語順までそのまま写したような逐語訳の文体中に、uuihero kemeinitha のような表現が突然現れるのはいかにも奇妙である。調査してみると果たして、Weißenburger Katechismus の原文ラテン語中の Credo 部分に、sanctorum communionem という1句が見つかる。¹⁹⁾ 現行の Credo と並んで、こうした別の本文も当時広く用いられていたと考えられる。すなわち、この St. Gallen の Credo における、in uuiha khirihhun, in liip euuikan の各部分も、それぞれ原文の段階で in unam sanctam catholicam, in vitam venturi seculi のような形であった可能性がある。2つめは、ドイツ語の gilouben を前置詞 in と共に用いる用法が、自然で本来的なものであった可能性である。そうであるならば、これらの箇所は、ラテン語の格支配の影響とは無関係に、ドイツ語 gilouben の目的語として本来ふさわしかった in+対格を用いて訳したということになる。この仮説が妥当でないことは、以下の各作品についての論考で明らかになるであろう。3つめは、「ラテン語 credo は(「神あるいはその属性を信じる」という意味を表す場合には)前置詞 in と共に用いる」という固定的な知識が、翻訳者の頭の中にあった結果、翻訳者が頭の中で独自に原文に in を補って読み、さらにそれを機械的にドイツ語に置き換えたという可能性である。1.4に見られた字面通りの模倣と比較すると、これは高度に学問的な Hyperkorrektion とも言うべ

19) credo in spiritum sanctum, sanctam ecclesiam catholicam, sanctorum communionem, remissionem peccatorum...(Steinmeyer: a. a. O. S. 30.)

き現象であり、さらに、ラテン語原文に見られる動詞の交替を無視して、ドイツ語では動詞を *gilouben* で統一した結果、*credo in* → *gilouben in* という構図が、ラテン語の原文とは無関係の箇所にも出現するようになったのである。ここから、この *gilouben in* という語法が当時の教会の知識人の間に定着し、一種の *Gelehrtensprache* としてオリジナルの作品にも用いられるようになるまでは、ほんの一步の道のりである。その実例は、以下 Notker の詩編の翻訳に見ることができるであろう。²⁰⁾

1.7. Isidor

Isidor には動詞 *gilouben* の用例が 10 例あるが、²¹⁾ 前置詞 *in* を伴う用法は 1 例もない。なお、この 10 例に関しては、原文の対応するラテン語も全て、*in* を伴う語法を用いてはいない。

1.8. Lorscher Beichte

1.2 と同様の、懺悔(告解)の際の定型的文章である。*gilouben* の用例は 4 例あるが、いずれも 4 格の代名詞を補足語としており、*in* を伴った用例は見られない²²⁾ (この告解文には、*Credo* を下敷きにした部分は含まれていない)。

1.9. Monseer Fragmente

福音書のマタイ伝の訳、1.7 の Isidor の翻訳の一部などを含む、断片的な写本のテキストである。古くから、Isidor の翻訳者との近い関係が指摘されていたが、Matzel は、詳細な比較検討の結果、Isidor の翻訳者と Monseer

20) Notker は前置詞 *in* ではなく *an* を用いているが。なお、解釈の仕方によっては、Otfird にもこの例があると考えられる。1.12 を見よ。

21) ここでは、パリ写本に含まれるテキストのみを対象とした。モンゼー写本に含まれる部分に関しては、Monseer Fragmente の項で扱う。なお、Isidor のテキストは、Hench, Georg A.: *Der althochdeutsche Isidor*. Trübner, Straßburg 1893 を用いた。

22) テキストは、Braune / Ebbinghaus : a. a. O. S. 58f. を用いた。

Fragmente の翻訳者は同一であるとの結論を出している。²³⁾

Monseer Fragmente 全体には gilouben の用例が 6 例含まれるが、in を伴っている例はない。²⁴⁾ 6 例全てに関して、対応する原文ラテン語も前置詞 in を伴う語法を用いてない点も、Isidor と同じである。

1.10. Murbacher Hymnen

全 26 歌からなる、キリスト教の賛歌の行間逐語訳である。gilouben の用例は 8 例含まれ、うち、前置詞 in を伴う用例が 1 例ある。²⁵⁾

I .12. in dih christ kalaupantero

(in te, christe, credentium)

「キリストよ、汝を信じる者たちの」

原文を併記したが、原文ラテン語と全く同じ形を用いていることがわかる。Murbacher Hymnen は、全体として、語順や格形まで可能な限り忠実に模した、原文への従属性の極めて高い逐語訳である点に注意するべきである。

1.11. Notker, Notker-Glossator

Notker の著作に関しては、大部になるので、本稿では、代表作である、Boethius の *Consolatio Philosophiae* の翻訳、及び、詩編²⁶⁾ の翻訳に限って調査した。まず、*Consolatio* については、全テキスト中、gilouben の用

23) Matzel, Klaus: Untersuchungen zu Verfasserschaft, Sprache und Herkunft der althochdeutschen Übersetzungen der Isidor-Sippe. Röhrscheid, Bonn 1970.

24) テキストは、Hench, George A.: *The Monsee Fragments*. Trübner, Straßburg 1890 を用いた。

25) テキストは、Daab, Ursula: *Drei Reichenauer Denkmäler der altalemannischen Frühzeit*. Niemeyer, Tübingen 1963. S. 30-76 を用いた。

26) 預言書と教理問答 *Text* の翻訳を含む。

例は 37 例あるが、in+前置詞を補足語としている例は 1 例もない。²⁷⁾ これら 37 例に関しては、原文ラテン語の対応する部分にも、credo+in の語法が見あたらない点だが、Isidor や Monseer Fragmente の場合に共通するが、注目に値するのは、37 例中、そもそも前置詞格補足語を伴った用例が 1 例もなく、目的語のない用例、及び従属文を目的語とする用例以外は、全て格形を目的語としている点である。実はこの点も、Isidor 及び Monseer Fragmente に共通している。Notker の翻訳は、原文に縛られない極めて自由な翻訳であり、多くの箇所、原文ラテン語に全くない注釈を大量に含む、ほとんどオリジナルの文章と言ってよいものである。また、Isidor 及び Monseer Fragmente も、古高ドイツ語初期の作品としては、非常に洗練された、こなれた翻訳であると研究者の間で認められている。すなわち、これらの作品には、当時の自然で本来的なドイツ語の語法が色濃くあらわれていると考えられるわけであり、これらの諸作において、gilouben+前置詞格補足語の語法が全く見られないことは、in+4 格のみならず、そもそも前置詞格補足語自体が、gilouben の目的語として本来のドイツ語では用いられなかった可能性を示唆している。この可能性は、中高ドイツ語や、他のゲルマン語に保存されている、アルカイックな特徴や異教的要素を色濃く残した作品を調べることによって、一層信憑性を増す。古高ドイツ語には、わずかな断片を除いて、自然な口語の古い言語習慣をよく保存していると考えられる英雄叙事詩・歌謡は残されていないが、古英語の Beowulf や、中高ドイツ語の Nibelungenlied を繙くと、これらにおいても、gelyfan, gelouben はそれぞれ、目的語をとる場合には全て格形と共に用いられており、前置詞格補足語の用例は 1 例もないのである。²⁸⁾

27) テキストは、Tax, Petrus W. (Hrsg.): Notker der Deutsche. Boethius, »De consolatione Philosophiae« Buch I/II (1986), Buch III (1988), Buch IV/V (1990), Niemeyer, Tübingen. による。

28) Bäuml, Franz H. / Fallone, Eva-Maria: A Concordance to the Nibelungenlied. Maney, Leeds 1976. 及び、Schaubert, Else von (Hrsg.): Heyne-Schückings Beowulf. 3 Bde. Schöningh, Paderborn 1963. を参照。なお、古ノルド語では「信じる」はドイツ語 glauben の同根語ではなく、trauen と語源を同じくする trúa を用いる。

一方、詩編中には、gilouben の用例が 65 例あるが、このうち 17 例が、前置詞格補足語を伴う用例である。²⁹⁾これはすでに、Boethius における対応とは際だった相違を示しているが、興味深い点は、これら 17 例全てが、前置詞 an (+ 4 格) を用いていることである。

40, 16. (IL.)³⁰⁾ so gloubint se alle an ín

「そうしたら、皆が彼 (キリスト) を信じるだろう」

63, 14. ube siê an dih keloubtin

「もし彼らがあなた (神) を信じていたら」

93, 1. Die gerno an míh keloubtin

「私³¹⁾を喜んで信頼した者や」

118, 8. Kelôube an in

「彼 (神) を信じなさい」

164, 19. Vuir suln geloûben an ín.

「私たちは、彼 (神) を信じなければならない」

213, 7. (IL.) nals an in ze geloûbenne 「それ (キリストの生命)

を信じるためではなく」

215, 24. (IL.) so gelouben uuir an in

「こうして私たちは彼 (キリスト) を信じる」

235, 26. (IL.) Keloubint an Got

「神を信じなさい」

235, 26. (IL.) unde so geloubent an míh

「そして同様に私 (キリスト) をも信じなさい」

29) テキストは、Tax, Petrus W. (Hrsg.): Notker der Deutsche. Der Psalter. Psalm 1-50 (1979), Psalm 51-100 (1981), Psalm 101-150, die Cantica und die katechetischen Texte (1983), Niemeyer, Tübingen. によった。

30) 本稿においては、記号 IL. は、写本の行間に記された語釈・注釈を表す。この箇所は、Notker の Text 自体がラテン語で書かれており、その行間にさらにドイツ語の訳が書き加えられている。

31) = 詩編の唱者。聖書によれば、ダビデ王。

- 279, 8. Vuanda sie an Got ne-gloûbton
「なぜなら彼らは神を信じなかったから」
- 323, 18. (IL.) unde diê an in geloûbint
「そして彼（キリスト）を信じる者たちのことである」
- 324, 12. (IL.) an den geloûben demo sie gelih ne-mugun sîn
「彼らが匹敵し得ない者（神）を信じること」
- 487, 6. ih mêino diê an ín geloûpton
「私が言っているのは、彼（神）を信じた者たちのことである」
- 544, 10. Kehâlt mih truhten. unde unsih alle an dih keloubente
「主よ、私を救って下さい。そしてあなたを信じる我々全てを」
- 552, 18. die an dih keloûbent
「あなた（神）を信じる者たちが」
- 565, 2. Ih keloubo an Got âlmâhtigen fâter
「私は全能の父を信じます」
- 565, 21. Geloubo an den hêiligen geîst
「私は聖霊を信じます」

原文ラテン語の対応を見ると、17例中9例が、credo+inの翻訳である。³²⁾ 残る8例中、1例³³⁾は credimus ei と与格補足語を示し、7例は、そもそも原文に動詞 credo を含んだ表現がない。

先に見た Boethius の翻訳において、credo - gilouben の対応 37例全てが、ドイツ語ラテン語双方において前置詞格補足語を1例も示していないことと、この詩編の訳においてドイツ語に現れる gilouben+前置詞格補足

32) 40, 16. (IL.), 213, 7. (IL.), 235, 26. (IL.), 235, 26. (IL.), 279, 8., 323, 18. (IL.), 324, 12. (IL.), 565, 2., 565, 21. ただしこのうち、279, 8., 321, 18. の2例は、原文において in+対格ではなく、in+与格を示している。なお、IL.の部分は文字通り行間訳であり、Notker のテキストのうちでは逐語訳的要素が強い部分であることを指摘しておく。ラテン語 credo in との対応が IL.の部分に多く見られるのも、故なしとしなない。
33) 215, 24. (IL.)

語の用例 17 例のうち、半数以上の 9 例が *credo+in* の翻訳であることを考えあわせると、これらの対応は、こうした前置詞格補足語を用いた表現が、ラテン語に倣って恣意的に作り出された語法であると考えられる際に、最もよく説明がつく。さらに、より古い時代の作品に見られたように、前置詞の選択までラテン語に倣って *in* を採用せず、全て *an* を用いているのは、*gilouben+in* という完全な模倣に基く語法が、ドイツ語の自然な語感にそぐわず、前置詞格補足語を用いるならば、前置詞に *an* をとる方がドイツ語としてより自然であったためと考えられる。

さらに注目に値するのは、ほぼ全ての *gilouben+an* の用例において、当該の前置詞格補足語が、「神・キリスト・聖霊」といった、高度に宗教的な内容を示しており、この場合の *credo - gilouben* が、キリスト教信仰の核心をなす「信じる」を表していることである。これは、1.4、1.6 等で見た *Credo* において繰り返される、*credo in ...* 「我は…を信ず」と響き合うものであり、おそらく同じ起源をもつものである。³⁴⁾ すなわち、*credo in* を訳したものである *gilouben in / an* は、元来、キリスト教信仰の中心をなす、神やその属性を対象とする、特別な「信じる」について用いられたのであった。これは *Wulfila* のゴート語の *galaubjan* に見られる、格形の補足語と前置詞格補足語の使い分けとも一致している。また、こうした意味上の機能があつたゆえに、原文ラテン語に対応する表現のない、オリジナルのドイツ語部分にもこの *gilouben in / an* が用いられることが可能だったのである。*Notker* の詩編訳に見られる、原文ラテン語の対応のない *gilouben an* の用例 7 例と、ラテン語が前置詞を伴わない与格形を用いているのに、ドイツ語では *an+対格* で訳されている 1 例は、この実例である。

はじめは、原文の語法をあくまで尊重するための模倣に過ぎなかった前置詞格補足語の用法が、「神あるいはその属性をなすものを信じる」という特別な意味を担う語法として定着し（この過程で、直訳の *in* がより自然な

34) 聖書のラテン語における *credo in* は、それ自体、ギリシャ語の *πιστεύω εἰς* の訳である。

anにとって代わられた)、その後、広く用いられるに従って意味の範囲が拡大し、現在に至ったと考えることができよう。上記 93, 1. の例において、「隣人たちが、(詩編の唱者である)私 (=ダビデ王) を信頼する」という意味で *gilouben an* が用いられているのは、こうした *Bedeutungserweiterung* の萌芽と考えることができる。³⁵⁾

1.12. Otfrid

Otfrid 全編中には、動詞 *gilouben* の用例が 96 例ある。このうち、前置詞 *in* (+対格) を伴った前置詞格補足語が用いられている例は 9 例ある。

2. 12, 85. *Bi thiu sie ni gilouptun, in then gotes einogon sun,*

「彼らが神のひとり子を信じなかったため」

(*Joh. 3, 18. quia non credit in nomine unigeniti Filii Dei,*)

3. 16, 69. *Filu thero liuto giloubta in druhtinan tho,*

「そこで人々のうち多くの者が主を信じた」

(*Joh. 7, 31. De turba autem multi crediderunt in eum*)

3. 20, 173. *Giloubistu in then gotes sun ... ?*

「あなたは神の子を信じますか？」

(*Joh. 9, 35. Tu credis in Filium Dei?*)

3. 20, 179. *giloub ih fasto in thinan duam.*

「私は確かにあなた (キリスト) の力を信じます」

35) なお、Notker については、DWB が、詩編のウィーン写本のテキストにおいて *gilouben in* の用例が見られることを報告している (DWB Band IV. I. IV, S. 7823)。*sin liument intluhtet die in in gloubent* 「彼の栄光は、彼を信じる者たちを照らす」。ウィーン写本は、本稿で用いた Tax の刊本の底本であるザンクトガレン写本に比べて、本来性の低いテキストであり、ザンクトガレン本の方がオリジナルの状態を示しているが、ザンクトガレン本において *an* で書かれた本文が、ウィーン本において *in* に改められたのであれば、これは、古高ドイツ語において *gilouben in* が、特殊な意味をもつ一種の *Gelehrtensprache* として定着していたという本稿の仮説に対する傍証となりうる。

3. 24, 29. So uuer so in mih giloubit, ... zi lib er thoh biuuirbit, sid er hiarirstirbit

「私を信じる者は誰でも、... たとえ死んでも生き返るのである」

(Joh. 11, 25. qui credit in me, etiam si mortuus fuerit, vivet.)

3. 24, 31. Inti alle, ... thie giloubent in mih, ..., nirstirbit in euuon

「そして、私を信じる全ての者は、永遠に死なないのである」

(Joh. 11, 26. et omnis qui ... credit in me, non morietur in aeternum.)

4. 15, 4. in got giloubet ioh in mih.

「神と私(キリスト)を信じなさい」

(Joh. 14, 1. Creditis in Deum, et in me credite.)

5. 16, 28. toufet sie inti bredigot, thaz sie gilouben in got.

「洗礼を授け、教えを述べ伝えなさい。彼らが神を信じるように」

9例中、6例については、福音書のヨハネ伝中に、対応する箇所が見られる。そのラテン語原文と一緒に記したが、対応箇所が確認できる6例全てにおいて、ラテン語でも *credo in* が用いられている点に注目されたい。96例に及ぶ *gilouben* の用例中、*in* を伴う前置詞格補足語を示している例が9例のみであること、また、その9例中、ラテン語の原典が確認できる6例全てについて、原文ラテン語中にも同様の表現が見えることは、この *gilouben in* という語法が、ラテン語に倣って作られた用法であることを示している。原典の存在が確認できない残る3箇所についても、Otfridが執筆の際に参考にしたであろうラテン語による宗教的な著述中に、同様の表現が使われていた可能性が高い。また、現行のヨハネ伝のラテン語本文とは若干違ったテキストをOtfridが用いていた可能性もある。

1.13. Otlohs Gebet

gilouben の用例が 1 例あり、in+ 4 格を伴っている。³⁶⁾

1. aller dero, di in dih gloubant

「あなたを信じる全ての者の」

(omnivm in te sperantium)

原文の対応箇所を併記したが、見ての通り、原文ラテン語も、in+対格という前置詞格補足語を用いている。補足語として in+対格という形を用いている点については、ラテン語の影響が明らかである。

ただし、原文の動詞が credo でなく spero であるのに、gilouben を用いて訳していることや、sperantium という現在分詞を用いた表現を、関係文で訳し直していることで明らかのように、翻訳は必ずしも機械的な逐語訳ではなく、なかなか柔軟なものである。そこに gilouben in という語法が現れていることは、以下 1.15 に示す Tatian の場合等とは違い、上記 Notker の gilouben an に見られたような、Gelehrtensprache として古高ドイツ語に定着した用法である可能性も否定できない。

1.14. Physiologus

古高ドイツ語訳 Physiologus には、gilouben の用例が 1 例あるが、in を伴う前置詞格補足語は用いられていない。³⁷⁾

1.15. Tatian

Tatian の全 Text 中に、gilouben の用例は 119 例あり、このうち 37 例

36) テキストは、Steinmeyer: a. a. O. S. 182-188 を用いた。

37) テキストは、Maurer, Friedrich: Der altdeutsche Physiologus. Niemeyer, Tübingen 1967. を用いた。

が、in を伴う前置詞格補足語を示す用例である。³⁸⁾

133, 1. giloubis in then gotes sun?

「あなたは神の子を信じますか？」

133, 1. ih giloubu in inan

「私は彼を信じます」

21, 8. Thie thar giloubit in then sun

「子を信じる者は」

82, 7. ther in mih giloubit ni uuirdit io thurstager

「私を信じる者は決して渴くことがない」

82, 7. giuuelih ther thie ... giloubet in inan,

「彼を信じる者は誰でも」

119, 8. thaz iogiuuelih thie in in giloubit ni furuuerde

「彼を信じる者が誰も滅びないためである」

119, 9. thaz iogiuuelih thie in in giloubit ni furuuerde

「彼を信じる者が誰も滅びないためである」

119, 11. uuanta her ni giloubta in namon einiges gotes sunes.

「なぜなら彼が神のひとり子の名を信じなかったからである」³⁹⁾

129, 5. Ther in mih giloubit,

「私を信じる者は」

135, 15. thie thar in mih giloubit, cisperi ob her tot uuirdit, lebet.

「私を信じる者は、たとえ死んでも生きる」

135, 15. iogiuuelih thie dar lebet inti in mih giloubit, ni stirbit ci

38) テキストは、Sievers, Eduard: *Tatian. Lateinisch und altdeutsch mit ausführlichem Glossar*. Schönningh, Paderborn ³1966. (=unveränderter Nachdruck der 2. Auflage) を用いた。

39) この箇所、ドイツ語訳だけでは「唯一なる神の子の名を」と読める。ここでは、福音書の原文を尊重してこのように訳した (ラテン語原文では、in nomine unigeniti filii dei)。

euuidu

「生きて私を信じる者は誰でも、永遠に死なない」

143, 2. therde giloubet in mih

「私を信じる者は…」

143, 2. ni giloubet in mih, oh in then therde mih santa

「…私を信じるのではなく、私を遣わした方を信じるのである」

143, 3. thaz iogiuuelih thiede giloubet in mih in finstarnesse ni
uuonet

「私を信じる者が誰も、暗闇の中にとどまることがないためである」

164, 1. thie dar in mih giloubit

「私を信じる者は」

82, 10. ther in mih giloubit, ther habet euuinaz lib

「私を信じる者は、永遠の命を得る」

162, 1. giloubet ir in got

「あなた方は神を信じている」⁴⁰⁾

162, 1. inti in mih giloubet

「同様に、私を信じなさい」

94, 4. Ther dar bisuuichit einan fon thesen luzilen the dar in mih
giloubent

「私を信じているこれらの小さき者の一人を躓かせる者は」

172, 5. uuanta ni giloubent in mih

「なぜなら彼らは私を信じないから」

82, 5. thaz ir giloubent in inan then her santa

「彼が遣わしたその人を、あなた方が信じることである」

40) giloubet ir in got inti in mih giloubet.この箇所、ドイツ語だけではどちらも命令法に読むことができるが、原文ラテン語では前半は直説法、後半は命令法である (creditis in deum et in me credite)。「神を信じるように、私をも信じなさい」の意である。なお、Otfridはこの箇所をどちらも命令法と解釈したようである。本稿の表題を見よ。

- 139, 10. Mit diu ir liocht habet, giloubet in liocht
「光のあるうちに、光を信じなさい」
- 179, 1. nibi furi thiethe giloubenti sint thurah iro uuort in mih
「(彼らのためだけ)ではなく、彼らの言葉によって私を信じる者たちのためにも」
- 129, 6. Thaz quad her fon themo geiste then sie inphahente uuarun
giloubente in inan
「彼はこのことを、自分を信じる人々が受ける霊について言ったのである」
- 119, 11. Ther in inan giloubit nist furtuomit
「彼を信じる者は裁かれない」
- 129, 9. Eno ni ening fon then heriston giloubta in inan odo fon
then Phariseis?
「長老やパリサイ人の中に、あの男を信じた者などいるだろうか？」
- 13, 6. then thie dar giloubtun in sinan namon
「彼の名を信じた者たちに」
- 19, 9. Giloubtun in inan tho sine iungiron
「そこで弟子たちは彼を信じた」
- 87, 9. Fon dero burgi manage giloubtun in inan
「町の多くの者が彼を信じた」
- 134, 11. Inti manage giloubtun in inan
「そして多くの者が彼を信じた」
- 135, 27. Manage fon then Iudeon ... giloubtun in inan
「ユダヤびとの多くが彼を信じた」
- 137, 4. uuanta manage thurah inan erfuoron fon then Iudaein inti
giloubtun in then heilant
「ユダヤびとの多くが、彼のゆえに離れて行き、キリストを信じたので」

143, 1. Thoh uuiduru fon then heroston manage giloubtun in inan

「しかし、長老の多くが彼を信じた」

143, 8. ni giloubtun in inan

「彼らは彼を信じなかった」

104, 1. Noh sine bruoder giloubton in inan

「彼の兄弟も、彼を信じなかったのである」

104, 9. Fon theru menigi manage giloubdun in inan

「群衆の多くが彼を信じた」

131, 12. Thisu imo sprehtentemo manage giloubtun in inan

「彼がこれらのことを話すと、多くの者が彼を信じた」

ラテン語原文を見ると、上記 37 例全てが、1つの例外もなく、ラテン語 *credo in* の翻訳である。こうした対応の状況は、*gilouben in* の語法が、少なくともラテン語の強い影響下にあること、おそらくは、翻訳文中において、ラテン語に倣って恣意的に作り出された語法であるということ、強く示唆していると言える。

1.16. Weißenburger Katechismus

gilouben の用例は 7 例あり、うち 3 例が、*in*+対格を補足語としている。⁴¹⁾

47. Gilaubiu in got fater almahtigon,

「私は父なる全能の神を信じます」

(*Credo in deum patrem omnipotentem*),

47. Endi in heilenton Christ,

「そして救世主キリストを (信じます)」

41) テキストは、Steinmeyer: a. a. O. S. 29-34 によった。

(et in Ihesum Christum,)

53. gilaubiu in atum uuihan

「私は聖霊を信じます」

(credo in spiritum sanctum,)

見ての通り、これも Credo の翻訳である。併記した原文を見てわかるとおり、ここでは in+対格の選択は明らかにラテン語の強い影響下にある。この翻訳が極めて機械的な逐語訳の方法によっていることは、fater almahtigon, atum uuihan のような語法を見ても明らかである。

2. 結論

以上、古高ドイツ語における gilouben in の実際の用例を詳細に見てきたが、ほとんどの例が、ラテン語の credo in の機械的な逐語訳であるか、あるいは、ラテン語の語法を可能な限り忠実にドイツ語に写そうという意図のもとに、恣意的に作り出された語法と解釈できることがわかった。gilouben in の用例が確認できた古高ドイツ語 9 作品のうち、Bruchstück einer Beichte, Fränkisches Taufgelöbnis, Murbacher Hymnen, , Tatian, Weißenburger Katechismus の用例全てと、Otfrid の用例の大部分、及び、おそらく Otlohs Gebet の用例は、こうしたラテン語の模倣によるものである。特に、古高ドイツ語において gilouben in が広く用いられていたという印象を与える強い要因である、Tatian の 37 例が全て、完全な模倣によるものと考えられる点は注目し値する。他方、Notker の詩編訳に見られる 8 例の gilouben an は、こうした模倣によるとだけでは説明がつかない。これは、はじめラテン語に倣って恣意的に作られた gilouben in / an という語法が、「神あるいはその属性を信じる」という特殊な意味をもつ語法として定着し、一種の Gelehrtensprache として自立して用いられるようになった結果と考えられる。Otfrid の 3 例及び St. Galler Paternoster und Credo の 2 例の gilouben in も、これと同じものであった可能性がある。

こうした、単純な模倣ではない、gilouben in / an の自立した用例を示すことによって、この語法がある程度古高ドイツ語の Syntax 中に定着していたと判断することは可能だが、その際に、ここでいう「古高ドイツ語」というものが、当時のドイツ語の全体像からするとごく部分的な一部であることにも注意しなければならない。こうした gelehrt な語法が、より広く民衆の間で用いられていた当時のドイツ語にも浸透していたとは考えにくい。このことは、Beowulf や Nibelungenlied のような作品に、gilouben + 前置詞格補足語の用例が 1 例も見られないことが強く示唆している。現存する古高ドイツ語のほとんどのテキストに見られるドイツ語は、ラテン語を自在に操り、それどころか、少なくとも、著述・筆記する際には、ドイツ語によるよりラテン語による方がはるかに容易であった⁴²⁾ 人々によって用いられたドイツ語、いわば全体として一種の Gelehrtensprache であったようなドイツ語である。著述に際しては、ラテン語がほとんど彼らの「母語」だったのであり、ドイツ語による著述の試みは、常にラテン語を範として、ラテン語の強い影響のもとに行われたのである。古高ドイツ語について研究する場合には、それがより巨大な中世ラテン文化の「一部」であることを決して忘れてはならない。古高ドイツ語の研究に際しては、そのわずかなドイツ語による試みをとりまく、その母体たる、はるかに巨大な同時代のキリスト教的ラテン語・ラテン文化の世界に常に目を向け、さらに、常にラテン語の側からドイツ語を見る目を養わなければ、大きな誤謬に陥る危険がある。ラテン語の影響の少ない大部の文献が残っていない古高ドイツ語の特殊な伝承の現状においては、これは不可欠の態度である。

(学習院大学助手)

42) これについては、Otfrid がマインツの大司教に宛てて書いた書簡を見よ。もちろん、この書簡自体もラテン語で書かれている。

„in got giloubet ioh in mih“ Althochdeutsch als eine Gelehrtensprache

Toshio Hirai

Im Althochdeutschen findet sich häufig die Konstruktion ‚gilouben in + Akk.‘, die dem heutigen Deutschen fremd ist:

in got giloubet ioh in mih. (O. IV, 15, 4.)¹⁾

Jacob Grimm meint in seiner „Deutsche Grammatik“, daß diese Konstruktion „sichtbar“ nach der ähnlichen lateinischen ‚credere in‘ gebildet worden sei,²⁾ während Moriz Heyne in seinem Artikel unter dem Stichwort ‚in‘ im Grimmschen „Deutsches Wörterbuch“³⁾ die Möglichkeit nicht leugnet, daß sie „selbständig in deutscher zunge erwachsen“ sei. In dieser Abhandlung habe ich sämtliche Belege der Wendung ‚gilouben in‘ in allen althochdeutschen literarischen Denkmälern, die im „Althochdeutsches Wörterbuch“ von Rudolf Schützeichel aufgenommen sind, aufgezählt und mit der jeweilig entsprechenden Stelle in der lateinischen Vorlage verglichen,⁴⁾ um zu beweisen, daß diese in der gegenwärtigen Sprache verschwundene Konstruktion ein

1) Kelle, Johann: Otfrids von Weissenburg Evangelienbuch Band 1, Text und Einleitung. Aalen, 1963 (Neudruck der Ausgabe 1881). S. 265.

2) Grimm, Jacob: Deutsche Grammatik 4, 2. Teil (1898). Olms, Hildesheim 1989. S. 1034.

3) Grimm, Jacob u. Wilhelm: Deutsches Wörterbuch. Hirzel, Leipzig 1854-1960. Band IV. II, S.2101.

4) Bei Notker habe ich aber wegen der physischen Menge seiner Werke nur zwei Hauptstücke als Gegenstand der Analyse benutzt, nämlich die Übersetzungen von „De Consolatione Philosophiae“ und „Psalter“.

Beispiel der althochdeutschen Lehnsyntax aus dem Lateinischen war.

In 8 althochdeutschen Denkmälern sind insgesamt 57 Belege der Konstruktion ‚gilouben in‘ zu finden, nämlich 37 Belege in Tatian, 9 in Otfrid, 3 in Fränkischem Taufgelöbniß, 3 in Weißenburger Katechismus, 2 in St. Galler Paternoster und Credo, je 1 in Bruchstück einer Beichte, Murbacher Hymnen und Otlohs Gebet. Daneben zeigt Notkers Psalter 17 mal ‚gelouben an‘, das wegen der Verwendung der präpositionalen Ergänzung mit dem ‚gilouben in‘ der anderen Denkmäler gleichzusetzen ist, aber gleichzeitig durch die im Althochdeutschen einmalige Wahl der Präposition ‚an‘ gekennzeichnet ist.

Von den genannten 74 Belegen (einschließlich 17 ‚gelouben an‘ in Notkers Psalter) sind bei 61 die gleiche lateinische Konstruktion ‚credere in‘ als die direkte Entsprechung in Vorlagentexten zu finden. Diese Stellen könnten nämlich das Ergebnis eines rein wortwörtlichen Übersetzungsverfahrens sein. Dagegen ist bei den übrigen 13 Belegen (= 8 in Notker, 3 in Otfrid und 2 in St. Galler Paternoster und Credo) ein von der lateinischen Vorlage unabhängiger, im Althochdeutschen spontaner Gebrauch der Konstruktion festzustellen. Aus der sorgfältigen Analyse des Belegverhältnisses läßt sich folgendes erschließen:

1. Die Konstruktion mit der präpositionalen Ergänzung war eigentlich dem Deutschen fremd;

2. Durch die wortwörtliche Nachahmung der lateinischen Konstruktion ‚credere in‘ wurde ‚gilouben in‘ auch im Deutschen gebildet und in Übersetzungen breit verwendet;

3. ‚gilouben in‘ wurde eine idiomatische Wendung mit der spezifisch christlichen Bedeutung, daher wurde es allmählich auch ohne direkte lateinische Vorlage im Althochdeutschen verwendet;

4. Die Präposition ‚in‘ wurde durch ‚an‘ ersetzt, um dem natürli-

cheren Sprachgefühl zu folgen.

Die Konstruktion 'gilouben in' ist in überlieferten althochdeutschen Texten einigermaßen verankert und konnte auch unabhängig von der lateinischen Vorlage verwendet werden. Aber dabei muß man beachten, daß dieser Gebrauch unter einem sehr starken Einfluß des Lateinischen entstanden ist und sich verbreitet hat. Die Konstruktion gehörte nämlich sozusagen der Gelehrtensprache der damaligen lateinkundigen, bei den geistigen Gedanken sogar lateinisch denkenden Mönchen an, deren Gebrauch der Muttersprache stark von der alltäglichen Volkssprache abgewichen haben könnte, vor allem beim Schreiben, weil ja die deutsche Sprache da allererst mit Mühe und Not mit dem Muster des Lateinischen niedergeschrieben zu werden begann. Das größte Problem ist dabei, daß die bis heute erhaltene althochdeutsche Überlieferung nur wenige weltliche, volkstümliche Texte, die vom lateinischen Einfluß frei sind, enthält. In diesem Sinne könnte man sogar das gesamte Althochdeutsche als *eine* Gelehrtensprache bezeichnen. Bei der Forschung über das Althochdeutsche ist es immer wichtig, die in der Sprache vorhandenen lateinischen Einflüsse richtig zu bewerten und das gesamte althochdeutsche Schreibwesen aus dem Standpunkt der weiteren christlich-mittellateinischen Kultur zu betrachten.